砺波カイニョ倶楽部会報　第61号
平成22年11月発行　発行者　砺波カイニョ倶楽部　代表幹事　柏樹直樹
事務局　富山県砺波市表町14-10　電話　0763－33－6588　　天野一男建築工房内

250名の参加で屋敷林フォーラム

10月23日庄川生涯学習センターホールで「2010全国屋敷林フォーラムｉｎ砺波平野」が開かれ250名が参加した。

砺波カイニョ倶楽部　柏樹直樹代表幹事が「何か一つでもカイニョの喜ぶものをつかんで帰ってほしい」と開会挨拶をし、上田信雅砺波市長は「カイニョは緑の真珠、これを残すためのフォーラムに期待する。」と歓迎と期待の挨拶を行なった。安曇野市長からのメッセージを司会者の天野一男事務局長が紹介した。

フォーラムは京都大学川村 誠先生が「屋敷林を守り、後世に引き継ぐために」の基調講演.全国４地区、奥州市（岩手県）・鈴木公男氏、斐川町（島根県）・瀬崎勝正氏、武蔵野市（東京都）・荻野芳明氏、安曇野市（長野県）・場々洋介氏からそれぞれの現状と問題が提起された。

そのあと約70分間、砂田龍次散居村ミュージアム館長をコーディネーターにパネルディスカッションが行なわれた。

パネラーは発言順に有磯高校・島田誠治先生、富山国際大学・高橋光幸先生、人間文化研究機構・金田章裕先生、南砺市立福光美術館・奥野達夫先生、砺波カイニョ倶楽部・新藤正夫先生から体験、思いを提起された。

密度の高い約3時間40分のフォーラムから参加者はそれぞれ前向きにカイニョとの付き合い方を受け止めることができた。

フォーラム前日（10/22）は、散居村ミュージアム勉強会（約90名）で全国の屋敷林報告（後記事例報告者）を聞いた。その後、全国からの参加者等31名は、砺波平野の典型的な屋敷林（芳里三治、杉森孝一、根井仁一各宅）を見学した。夕方、夢の平展望台から砺波平野の全景を見学し、コスモス荘に入った。

10月22日夜、コスモス荘で情報交流会を行なった。

パネラーの先生、全国の参加者、富山県、砺波市、南砺市、各界関係者、カイニョ倶楽部員等56名が参加した。

柏樹代表幹事、上田砺波市長が歓迎とフォーラムの成功を願い、指導と協力を求めた。大浦南砺市長代理が乾杯の発声をし、懇談に入った。井上五三男砺波市議長と旦見公順南砺市議長からスピーチをいただいた。全国からの参加者を司会者の出村忍さんが紹介した。約２時間各テーブルごとに楽しい会話がはずみ、色んな交流が少しのアルコールを仲立ちに深められた。

最後に井上 学県農林振興センター次長が「明日のフォーラムを成功させよう」としめくくった。

10年（平成22年）10月23日 土曜日　北日本新聞　地域ニュース

■伝統的家屋を見学　23日に砺波市で開かれる「2010全国屋敷林フォーラムin砺波平野」（北日本新聞社後援）を前に22日、県外からの参加者ら約30人が砺波地方の伝統的家屋を見学した。

岩手県奥州市、長野県安曇野市、島根県斐川町、東京都武蔵野市から参加し、3カ所を回った。

築約130年を誇る砺波市堀内の芳里三治さん(65)方では、砺波カイニョ倶楽部の柏樹直樹代表幹事らが建築の特徴や敷地内の樹木などについて説明した。

フォーラムは23日午前9時から砺波市庄川町青島の庄川生涯学習センターで開く。入場無料。同倶楽部、となみ野田園空間博物館推進協議会主催。

〈基調講演〉

「屋敷林を守り、後世に引き継ぐために」

— 景観ガバナンスの可能性 —

京都大学　農学博士　　川村　誠　先生

〇散居・屋敷林はあることだけで美しく、価値があり、後世に引き継ぐ責任がある。
〇地域指定（ゾーニング）と重点地区の周辺に緩衝帯（コア、バッファー）を設ける。
〇自治会単位の計画――権限が発生し、責任が生ずる（生活の風景）
　集落、自治会がしっかりすること、住民協定が大事
〇つくったのも人間、維持するのも人間
〇具体的な提案――世界遺産への道
　１．農村、農地の保全、しかし、こだわらず、生活のあり方を規制しない
　２．住民参加、集落の自活力で（ガバナンス）――話合いの場
　３．新しい支援チャンネル――行政、企業、何よりそこに人が住むこと
　４．目標に向い
　　①住民の力、気持を集結
　　②世界遺産の可能性（制度的に非常に有利だ）
　　③フォーラム等は連携をとるチャンス

全国4地区の状況 ― 現状 と 問題

■奥州市胆沢・鈴木公男氏
〇丹沢川河岸段丘 400ha にある散居村、スギ中心の防風林が家屋の周りに、特に N、W 面にある。生垣もあり、木積間のあることが特徴。
〇森づくりクラブと、散居ガイドの会が活動している。

■斐川町・瀬崎勝正氏
〇築地松で暴れ川（斐伊川）から家を守った。洪水、防潮、火災から守り、美観、風格、いやし、緑フェンスの効果
〇人のつくる形、その職人が高齢化、現状を守り維持することが課題。

■武蔵野市・荻野芳男氏
〇緑地が 33%から 24%に減少している。
〇維持するため、
①市民財産として育てる
②コミュニティの形成、
③自治体経営、町内の緑の保全

■安曇野市・場々洋介氏
〇水と緑と北アルプスの中の扇状地、70%が山だ
〇市民の共有財産として地域で維持する道を模索

〈パネルディスカッション〉

体験・研究をとおした提言

■島田誠治先生
〇屋敷林から学ぶ、①地域農業、②環境、③風土・歴史
カイニョ調査の中で子どもは一層積極的になる、その教材が沢山見つかる。
〇ミクロ的に何故カイニョは気温緩和に役割を果たすのかも調べた。
〇継続でき、生きた教材としてカイニョは貴重。

■高橋光幸先生
〇地域の成長は地域で育ってきた資源の中にある。宝があっても活かす力がないといけない。
〇横型のゆるやかなネットワークを組もう。カイニョは全国的価値をもつスゴイ宝だ。
〇地域の歴史・文化資源は地域全体の礎石だ。
〇カイニョ保全・継承は現代人の責任
〇砺波の散居――①個性がある、②多様な土地利用、③非農家的利用と総合的な留意点をつめる。
〇具体的保全提案
①循環型地域システムを、②住み方の変化への対応策、③水田の保全の仕組みーデカップリング、コメのフェアトレード、④非農家的利用のゆるやかな規制、⑤伝統文化の継承――楽しみながらみんなでとりくむ。

■金田章裕先生
〇散村地帯の町部分もふくめた地域計画が必要
〇文化的景観としても生活者がいて、変えていく中の調和、持続性を重視
〇外国では森のある家は社会的ステータス。そこに住む動物、植物と一緒に生きる値打ち（あこがれになっている）

■奥野達夫先生
〇散居のカイニョの中でどう楽しむか――今の体験を案内する（庭のスイセン、チューリップ、キジがくる）
〇人が集う仕掛けを。新幹線を生かせるライフスタイルも考えよう。
〇カイニョは生活の舞台装置――日本の原風景、魅力を発信する。
〇３０代首都圏に住む女性の目で考えてもらう。発想を変えて本物の情報発信を。

■新藤正夫先生
〇最近、飛騨屋地区で若者と話し合った。――カイニョの手入れがひどい。仕方なく維持、「負の遺産だ」と。
〇アンケートでは「あった方がよい」70%、イメージとして求めている。
〇あらためて美しい景観、緑の環境の価値を知る努力を。
〇市民の共有財産だ、地域あげて一緒になって取組む道を考えよう。

■砂田龍次コーディネーターのコメント
〇全員が素晴らしい遺産だといわれた。我々はあたりまえと思ってきた。
〇先人のつくった智恵であり、生活に密着したものだった（カイニョは）
〇日々のとりくみに生かすためのヒント・ポイントがもらえた。
〇これからの生活にあうようにどうするか？　どんなつき合い方をするかが課題。

〈参加者の声〉
〇屋敷林の存在が、世界から評価されるとの提言に驚き、この地域の住民としてもう少し屋敷林と関わる行動をとりたい。
〇新たな屋敷林の保全、創造に向け、地域全体の力・主導・連携を散居村に住む住民の主体的な意見としてつくり広めていく手段がほしい。
〇全国４地区の屋敷林の現状報告は参考になり、今後は共に屋敷林保全の課題に対する解決策を探ることが必要。
〇屋敷林フォーラムの意義と必要性を継続し、もっと多くの住民の心に響き伝わるように活動していくことが時代の要請。
〇屋敷林のもつ重要文化的景観、世界遺産的な価値とそこに住む者の思いに大きな開きを感じながら、新しい視点として受入れ、何をすべきか考え合うことか。